



福島市

未来型複合施設「コラッセふくしま」を 市民団体がUDチェック



福島駅西口に誕生した「コラッセふくしま」

県と市の窓口を 隣り合わせにすることで パスポート申請の煩雑さを解消

福島駅西口に今年7月、未来型複合施設「コラッセふくしま」が誕生した。「コラッセ」とは福島弁で「来てください」の意味を持つ言葉。広く市民に愛称を募集し、今年2月に採用された。

中小企業支援と産業振興を主眼として生まれた地上13階地下1階のこの建物は、県、市、商工団体の3者が区分所有し、管理組合方式で運営されている。市の行政サービスセンターが入居する1階は、ビジネス目的以外の来館者が比較的多いフロアだ。

戸籍抄本や住民票を発行する行政サービスセンターの隣には、県のパスポート

センターが並ぶ。市役所で必要書類を入手し、県庁で申請しなければならぬ煩雑さは、ここに来れば解消される。仕事帰りに利用する人を考慮して、夜7時までオープンしている。1階にはこのほか、

市の市民活動や観光をPRするコーナーや県の観光物産館が入居している。観光物産館は会津漆器や三春駒など、県内の名産品を一堂に集めて展示販売するスペースだ。

4階まで吹き抜けのアトリウムの周りに配置されたこれらの施設が一体となつて、にぎわいを創出している。

建物の使い勝手を オープン前にチェック

建物は「ハートビル法」や県の「人になさしいまちづくり条例」を踏まえて設計

れた。

新しく施設の隣に整備した駐輪場へ自転車利用者を誘導したので放置自転車は、見かけなくなった。

「子どもの夢を育む施設」に UDを取り入れる

市で現在計画中の「子どもの夢を育む施設（仮称）」には、設計コンセプトとして、UDが盛り込まれている。既存施設のUDによる改修となると莫大な予算を要するが、最初からUDを意識していれば、改修に比べて低コストで済む。

UDをどのように建物に具現化するかは、基本計画づくりの段階で、多様な市民がどの程度参画するかにかかっている。この施設の場合、障害のあるなしにかかわらず、さまざまな子どもたちの意見を、どれだけ汲み取れるかが鍵になるだろう。市はUDの考え方をこれからの施設づく



「コラッセふくしま」エントランス

されたが、障害者団体や高齢者団体など14団体20数名が参加して、オープン前にUDの視点による施設チェックが行われた。調査箇所は駅からの案内に始まり、建物の展望ラウンジまで、利用頻度の高そうなすべての施設。

施設チェックでは、「トイレの洗浄ボタンと非常ボタンがわかりにくい」、「受付には手話のできる人を配置してほしい」など、多数の意見や要望がハード、ソフト両面で出された。報告書は「全体的に人にやさしいという

よりはデザイン重視の印象が強い。一般市民と企業の利用のどちらを念頭に置いているか不明」と総括している。

調査結果を受けての改善は管理組合で行うことになるが、3者で協議して、低廉な費用ですむものから実施していく構えだ。手話や外国語のできるスタッフは常時配置しないが、事前に連絡を受ければ派遣する方法も今後検討していくという。



4階まで吹き抜けのアトリウム

駅から建物への誘導に 音声チャイムを設置

市の管轄である駅前広場の一角には、サクランボやリンゴなど季節の果物が実る小公園がある。樹木を果樹にしようと発案したのは「果樹があれば楽しい」という旅館のおかみさんたちだ。駅から「コラッセふくしま」へは、緑が心地よい公園を通ってアプローチする。

UDチェックでは「駅から施設までの案内を表示してほしい」、「点字ブロックの上にある放置自転車を整理してほしい」との要望があった。これらについては、市で当初から計画されていたこともあり、オープン前に改善された。

一般の案内表示とともに、視覚障害者に考慮した音声チャイムが、所要場所に設置されている。音声チャイムの設置場所は、盲人協会にヒアリングして決めら



多目的トイレのピクトグラム



内部障害者にも対応しているトイレ



●市町村リポート
Koriyama City

郡山市

住民の視点に立った 行政ワンストップサービスによるUD化を推進

「市勢要覧2003・21世紀の躍進」UDの事例写真を掲載

郡山市は福島県の中央に位置し、東京から東北新幹線で80分、磐越東線、磐越西線、水郡線の起点となる交通の要衝である。もともとは猪苗代湖の水を引いた開拓地として発展したが、現在では商都としての色彩が強い。

郡山商工会議所が主催する「ふくしまユニバーサルデザイン・フェスティバル」と銘打った展示会が毎年開催されているように、地元企業のUDへの関心は県内の他都市に比べて高いようだ。同市に本店を構える菓子メーカーが、主要店舗にUDのトイレを設置するなど、積極的にUDを採り入れていこうとする地元企業もある。

同市の若手職員らによる研究会がユニ



郡山市の新しいランドマーク「ビッグアイ」

ーブや自動ドア、多目的トイレ、エレベーターなども後付けされた。

同校には一般学級に加えて、知的障害児と情緒障害児のクラスが併設されている。さまざまな個性の子どもたちが同じ校舎で学ぶことそれ自体が、UDへの第一歩ではないだろうか。

校舎の1階は障害児学級、2階は普通学級で構成されている。両者の交流は果たしてあるのだろうかとの疑問には、「遊んだり、喋ったり、日常的にありますよ」との答え。知的障害児の担当教諭は、「ま

ちのサインが理解できない子どももいるので、できるだけ絵文字（ピクト）を使ってほしい」と話す。

市内には同校ばかりでなく、施設面でUD化が図られている例は多数見られる。



障害のある子どもいっしょに学ぶ「芳山小学校」



階段の手すりを2本にした「芳山小学校」

バリアフリーを意識して建設された「21世紀記念公園」



「ビッグアイ」内の市民交流プラザ



福島県の交通の要衝、郡山市の駅前広場



まちのあちこちに水に親しめる空間が設けられている

土日曜日や祝日も住民票を発行する市民サービスセンター

郡山駅前広場に面して、地上24階、地下1階、高さが133mの再開発ビル「ビッグアイ」が屹立している。福島県内では最も高いビルで、郡山市の新しいランドマークだ。

「ビッグアイ」は商業施設、事務所施設、公共公益施設、駐車場施設の4つの用途で構成される複合ビルで、第3セクターが管理している。公共公益施設としては、市の施設に加えて、福島大学大学院サテライト教室や県立郡山萌世高校（単位制）による定時制・通信制課程を併せて設置された新しいタイプの県立高校）などが入居している。市の施設としては「ふれ

バーサルデザインをテーマとし、その研究成果をホームページに発表したのは4、5年前のこと。「市勢要覧2003・21世紀の躍進」では、だれもが暮らしやすいユニバーサルデザインのまちに、をキャッチフレーズとして、同市にあるユニバーサルデザインの事例（公園、道路、交通、サイン、教育施設など）を掲載している。

障害児も同じ校舎で学ぶように「自動ドアやエレベータを設置」

郡山市中心部に設置されている芳山小学校の階段には、真新しい手すりが付けられている。「一口に小学生といっても、背丈はまちまち。階段の手すりが1本だけだと不便なので、新学年を契機に2本にしました」と教頭は話す。玄関のスコ

あい科学館（20〜24階）」と「市民プラザ（6〜7階）」がある。

「市民プラザ」は「市民サービスセンター」、「市民ふれあいプラザ」、「市民交流プラザ」の3つで構成され、UDの考え方に立った行政のワンストップサービス（1つの場所で複数のサービスを提供する）を実施している。

同センターでは、午前10時から午後7時まで、月曜日を除いて、土日曜日、祝日も、住民票をはじめとする各種証明書の申請や戸籍の届け出ができる。これは、簡単なようで、なかなかできない取り組みだ。市民のニーズに的確に応えた結果であろう。センターでは車いすやベビーカーの貸し出しも行っている。



会津若松市

「会津浪漫」をキーワードに 衰退する商業エリアを蘇生



駅カフェ&会津地方28市町村のアンテナショップの機能を併せもつ七日町駅。止まっているバスが「ハイカラさん」



駅カフェの内部

歴史的な街並みを生かして 商店街の活性化を図る「七日町エリア」

JR会津若松駅から只見線のひとつ目、「七日町駅」がまちづくり関係者の中で話題になっている。もともと同駅は無人駅だったが、待合室を「駅カフェ」として全面改修することで、交流人口の増加をもたらした。「駅カフェ」は会津地方28市町村のアンテナ

ショップとしての役割を担い、各地のパンフレットや土産が陳列されているほか、会津の名水で入れた美味しいコーヒーも楽しめる。

同駅には、鶴ヶ城や飯盛山など市内の観光スポットをめぐるまちなか周遊バス「ハイカラさん」が停車する。この駅から市の中心である大町四つ角に続くのが七日町通りだ。この通りも、他都市と同様、中心商店街の空洞化により、商売をやめる店が現れていたが、大正モダンを感じさせる「会津浪漫」をテーマとして、レトロ調の街並みづくりに力を注いだことで、同市の商店街では唯一、空き店舗が減少している。

通りをはさんで、骨董店、旅館、食堂、洋品店などさまざまな業種の店舗が並ぶ。会津若松市は戊辰戦争の戦火によって、江戸時代の建物のほとんどは消失したが、第二次大戦時の空襲には遭わなかったため、明治期以降に建設された建物が残っている。新しいまちづくりを推進した「七日町通りまちなみ協議会」は、これら

の建築物を有効活用することで、過日の賑わいを取り戻そうとしたわけだ。

SL蒸気機関車に乗って 地ビールを飲みに行く

七日町エリアには、(株)まちづくり会津により、骨董品店などが入るテナントミックスビル「アイバッセ」が2002年、オープンした。同社はTMO(タウン・マネジメント・オーガニゼーション)として、市内全域において多彩な事業を展開しており、これもそのひとつだ。TMOとは米国で発展した住民参加のまちづくり手法で、そこに住む人々がプランナーとしてまちづくりを行う機関だ。

「アイバッセ」に隣接する、会津地ビールの工場レストランではビール見本市で金賞に輝いたできたての新鮮なビールを賞味することができる。鶴ヶ城や飯盛山



TMO(株)まちづくり会津が経営するテナントショップ「アイバッセ」。奥は会津地ビールレストラン「洲露花」

などの既存の観光スポットに加えて、七日町エリアも少しずつ観光の魅力を増しているようだ。昨年、郡山・会津若松間を走る「磐梯会津路号」も、全便七日町駅に乗り入れるようになった。

同エリアは市が立案した「交通バリアフリー基本構想(案)」の重点整備地区内にあり、七日町通りは特定経路(重点整備地区の中で、駅などの旅客施設と官公庁施設や福祉施設等を結ぶ経路で、歩道のバリアフリー化を進める必要がある経路)として位置づけられている。

豪雪地であることに考慮し、駅周辺などにおいて、消雪施設や流雪溝の整備、除雪の充実により、1年を通じたバリアフリー化を総合的に推進することも明記

されている。

「交通バリアフリー計画」により 「ゆるい、やさしいまち」

明治初年から続く海産物問屋を改修した旅館が七日町エリアにある。往時を偲んでか、屋号は「洪川問屋」。この旅館の主人が、(株)まちづくり会津の社長で、七日町まちなみ協議会の会長を務める、洪川恵男氏だ。

「大正浪漫をキーワードとして、七日町エリアの街並みはずいぶん変わりましたが、歩道が狭くて歩きにくい。道路が整備され、障害のある方も気軽にまち歩きを楽しむことができるようになれば、観光地としてのイメージはさらにアップす



明治初年から続く海産物問屋を改修した旅館「洪川問屋」



古い建物を資料館に改修した「レオ氏郷南蛮館」



野口英世青春通りの会津吉番館



会津若松市の中心街、中央通り

ることでしょう」と、洪川氏は道路改善の必要を強調する。

実際、七日町通りは幹線道路になっているために、まち歩きを楽しむには自動車交通量が多すぎる。

会津若松市の人口は約12万。全国の自治体を歩いて感じることは、人口10万前後の自治体に、シャッター通りといわれる空き店舗が目立つ商店街が多いことだ。七日町エリアも約7割が空き店舗だった。それが今では、通りを歩いても、空き店舗は見かけない。会津浪漫を掲げてまちづくりに取り組む七日町エリアの事例は、中心商店街に人を呼び寄せるための示唆に富む事例だといえる。



三春町

「小さな城下町」のまちづくりは うるおいと緑がキーワード

広々とした歩道と 統一感のある日本風の家並み

郡山市から三春町へは車で15分ほどの距離。何の変哲もない田舎道を走ると、突如として眼前に美しい街並みが現れる。車いすがゆうゆうとすれ違うことができ、広い歩道、統一感のある日本風の家並みに目を見張る。

樹木が生い茂る小高い丘は、昔の城跡だ。三春町は江戸時代、藩主秋田氏により、五万五千石の城下町として繁栄した。明治時代には「西の高知、東の三春」と並び称された自由民権運動の発祥の地でもある。最近では、ほとんどの町村が合併へ傾くなか、同町は住民の総意により、合併しない方針だ。子育てのお守りといわれる「三春駒」や古くから桜の名所として知られる「滝桜」など、この町には住民が誇れるものがいくつもあ

約800mのメインストリートには、役場庁舎をはじめとする公共施設や商業施設が並ぶが、他都市のようにシャッターを下ろしている店はない。夜になれば、三春駒をイメージしてデザインされた街路灯の柔らかい明かりが歩道を照らし、歩道の所要所にはベンチが配置されている。コンサートホールや公民館の機能をもつ「三春交流館まほら」もあれば、丘の上の高齢者住宅とエレベータにより結ばれた「福祉会館」もある。これらの施設はUDのさまざまな工夫がこらされている。

人口2万規模の町で、これだけの中心市街地を有しているのは、おそらくこのまちだけだろう。他に例を見ない美しい中心市街地は、伊藤寛町長の強いリーダーシップと地域に誇りをもつ住民との20年におよぶコラボレーションの果実といえる。

「三春まちづくり公社」を核に 中心商店街の空洞化を防ぐ

小さな町村の都市形成の在り方として、他の自治体の憧れでもある美しい中心市街地はどのようにしてできたのだろう。町は1982年、「三春町建築賞」を発足させ、1990年には「美しい町をつくる三春町景観条例」を制定。それ以降、「小さな城下町」にふさわしい都市景観を形成するための事業が飛躍的に進んでいく。

他都市と同様、郊外に大型店舗が進出する傾向の中で、中心商店街の空洞化を防止するために、町は1993年に第3セクター「三春まちづくり公社」を設立し、官民協働でさまざまな事業が展開されている。メインストリートに位置する「三春老番館」もそのひとつだ。パティオ（中庭）が特徴的なこの建物は、低層階は商業施設、高層階は住宅で構成されてお



人口2万のまちと思えない中心商店街



フラットで広々とした歩道



手前の「福祉会館」のエレベータを使って、丘の上の高齢者住宅にアクセスできる

り、地元農家で今朝採れたばかりの野菜を売る店舗もある。まちづくり公社は近くにある裏通りの古い蔵が残る地区にオフィスを構えている。このオフィスも、町の篤志家が寄付した蔵付きの建物だ。同地区の道路美化はシルバー人材センターから派遣された人たちが担っている。

草の根の国際交流を進める 「ライスレイクの家」

メインストリートの外れには、三春町国際交流館「ライスレイクの家」がある。この家はアメリカ・ウィスコンシン州ライスレイク市との姉妹交流を記念して建



米国人女性が館長を務める三春町国際交流館「ライスレイクの家」

アメリカ住宅の典型、ツー・バイ・フォー工法で造られたこの家に一歩足を踏み入れれば、そこはもうアメリカ。家具も調度品もすべてアメリカ製で、館長はライスレイク市出身の女性だ。1階の居間とダイニングは町民の応接間として使われ、会議室は子どもの英会話教室をはじめとするカルチャー教室やイベント会場として供用されている。緑が目映いオープンデッキで飲むコーヒーは格別だ。2階にはインテリアが異なる3つのベッドルームがあり、宿泊して異文化体験を味わうことができる。料金は2人で1



コンサートホールや公民館機能をもつ「三春交流館まほら」



役場庁舎横の公衆トイレは多目的トイレに改修された



街並みにマッチしたモダンな建物もある



まちの美化を行うシルバー人材センターの人たち

万円。名ばかりの姉妹都市交流が多い中、日常的に姉妹都市の暮らしに触れることができるのはおそらくここだけだろう。ゆったりと時間が流れる、田園の快適生活。真のスローライフが、このまちにはありそう